

豊能広域こども急病センター

2010.6.28

小児救急医療をめぐる

みんなで支え守ろう小児救急

吹田市医師会
山上 文良

救急・小児科・産科医療体制の崩壊寸前状態が、昨今強調されている。その予兆が至る所に表れていた平成16年に豊能広域こども急病センター（以下急病センター）は発足し、今年で6年経ちました。組織の正常機能年数を20年とすると人間に例えれば20歳台の青年期にあたります。

豊中市・吹田市・箕面市・池田市・能勢町・豊能町を対象地域とした広域小児救急機関です。平成16年～平成19年平均で年間約39,000人の患者さんを受け入れております。

平成20年、阪神北広域こども急病センター（伊丹市・宝塚市・川西市・猪名川町が対象）が発足してからやや減少したものの、平成21年度は、新型インフルエンザの流行により、平成20年度より8,000人多い方が受診されました。特に9月から11月にかけては、平成20年度の2倍の受診者があり、急病センターすらパンク状態になったのでした。

急病センターは、どんな陣容で維持しているでしょうか？医師は、阪大より派遣されている41名、各市医師会から出務している36名、それに国立循環器病研究センターから14名が応援に駆け付け合計91名の医師が小児救急に従事しています。また、看護師は30名、薬剤師64名、臨床検査技師11名、診療放射線技師15名の医療専門家集団により支えられ、それに加え事務局や医療事務職員、警備員など種々の職種の方々により運営されているのです。これはちょっとした「救急専門病院」といってもいいスタッフ数です。急病センターを受診された方で入院を要する或いは救急処置を要する患者さん（2次救急患者さん）は、後送病院が引き受けています。後送病院には市立豊中病院・市立吹田市民病院・箕面市立病院・市立池田病院・済生

会吹田病院の5病院が、曜日毎に担当し、また小児外科疾患には、阪大病院小児外科の協力を得てそれぞれ各病院で小児科・小児外科医師が待機しているのです。

毎年4万人近くに及ぶ患者さんが来所しておられますが、その内、入院或いは救急処置が必要であった患者さんの統計を取ってみると、2.5%でした。ということは、約97%の方が本来の意味での救急患者さんにはあたらなと言えのです。無尽蔵に有資格者がいるわけではなく、際限のない費用をかけられるほど、打ち出の小槌がある訳でもありません。小児救急はどうあるべきかを医療関係者だけでなく、患者さんの保護者や市民が考えていく必要があるのではないのでしょうか。

時間帯に関係なく、生死をかけた状態の方・入院を要する方・救急処置を要する方に対し対応できる体制をとることは是非必要でしょう。私どもは入院を要した例などの報告会を毎年開き、平成21年で第5回を数えました。肺炎・腸重積・けいれん重積・喘息などの入院例に加え、重症な糖尿病や巨大尿管症が見つかり、適切な治療を受けられる事に結びついた例などが報告されました。いかに救急患者さんを適切に見つけ、治療に結び付けていくかを勉強し、より高度な医療を提供すべく精進しております。最近はやりの言葉で言えば、「診断力」の向上を常に目指していかなければと考えています。今、受診しなくては行けない状態であるかどうか、その判断を私ども医療者側は勿論、保護者の皆さんもぜひ考えて欲しいのです。救急を要するか、どうかを判断するため、急病センターホームページには、参考となる事項について載せられておりますし、#8000番に電話をかけると、小児救急相談もできます。ぜひやっていただきたいことは、救急を受診し回復された後ももう一度振り返ってみる事です。自宅で看れないと思っていたが、後

で考えてみると自宅で様子を見ていてもよかつたこと、やはり救急受診しなければ分らなかったことなどを整理してみる事、そしてそれを蓄積していくことが大切です。

核家族化あるいは世代の価値観の違い、医療内容の変遷などがあり、いわゆる「おばあちゃんの知恵」に頼っておれない状況があります。日頃から子育てサークルなどで相談することも「子育て力」アップの一つの方法でしょう。かつての日本に比べ、地域の協力が乏しくなっていますので、近隣と協力し合って子どもを支えていくことも必要ではないでしょうか。私ども医療者の「診断力」「サポート力」に加え、保護者の方の「子育て力」がうまくかみ合い、小児救急が今後もうまく機能するように両者が努力していきたいものです。

「小さないのち」というNPOを展開し、ご自身がインフルエンザ脳症にてお子さんを亡くされた坂下裕子さんは、「小児救急の現状を保護者が理解することは不可欠で、保護者の認識が反れたら、小児救急はどんな対策をとっても破たんする。どんなシステムも崩壊する。」と述べておられます。

子どもは家族の宝ですが、「社会の宝」でもあります。豊能広域こども急病センターのような小児救急体制は、「社会の宝」を守り育てる一つのシステムです。『何時でも行ける』急病センターではなく、『いざという時に頼りになる』急病センターを目指し、小児救急体制の原点にいつも立ち返って、子ども同様この組織を大切に守っていききたいものです。



新しいワクチンが 揃い踏み

吹田市医師会 山上 文良

一昨年発売されたインフルエンザ菌b型ワクチン（ヒブワクチン）に加え、昨年末にはガンを予防するワクチンともいえる子宮頸がんワクチン、この2月には小児用肺炎球菌ワクチンが

発売され、ワクチン後進国と言われ続けていた日本もやっと世界並みになった。

ヒブワクチンと小児用肺炎球菌ワクチンは、双子のようなワクチンで、5%の方が死亡すると言われる細菌性髄膜炎の80%以上を併用することにより予防することができると言われている。

子宮頸がんワクチンは、性交渉が始まる前の年代である10歳以上の女子が対象で、20歳

～30歳代に増加している子宮頸がんを予防する。B型肝炎ワクチンと同様いわゆる「ガンを予防」するワクチンの登場である。世界と同じく日本も早く定期接種（ワクチン無料）として欲しいものである。



“お出かけバッグ”のご用意を！

看護師長 竹下 京子

早いもので、新型インフルエンザが日本に上陸してから1年が経過し、終息宣言も出されています。新型インフルエンザが世間に与えた影響は大きく、中でも、長い診察待ち時間は、当センターでも大変頭を痛め、適宜確実なトリアージ（多数の患者を重症度と緊急性によって分別し、治療の優先度を決定）を実施することで、重症患者さんの待ち時間を短縮できました。

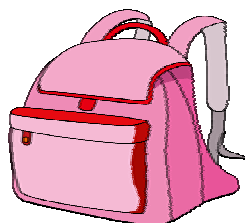
その他 携帯電話やインターネットで混雑状況がわかる受診待ちシステム（「ネコ目」システム）の導入やマスクの自動販売機の設置など 患者様の利便性向上に精いっぱい努めました。

ところで、今回、急いで来院されたためか何も持たずに来院され、お困りの保護者がおられるのに気付きました。そこで提案なのですが、急な外出にもちゃんと対応できるように“お出かけバッグ”（非常持ち出し袋）を事前に常備されては、いかがでしょうか。

バッグの中味は、お着替えセット、下着、おむつ、ハンドタオル、ウェットティッシュ、大好きな玩具、本や医療保険証と

お金が、基本になります。あとは症状にあわせて、アイスノンや洗面器などをプラスして、当センターへGOしていただくと、持ち時間も少しはリラックスして過ごせると思います。ほかに、バッグに何を入れておくと良かったか、読者のご意見をお寄せいただければうれしいです。

私たちスタッフ全員、こどもの大切な健康と笑顔を守っていくため、今後も、日夜、努力してまいります。



薬局から

薬剤師 日比千里

豚が由来のインフルエンザが猛威を振るい、殆どの方が免疫を持たなかったため急速な広がりをみせた夏から秋、この豊能広域こども急病センターにおいても過去最高の受診者の数を記

録し、薬局内にも嵐が起こった。

タミフルドライシロップが市場に無くなったので、タミフルカプセルをバラさなくてはならなかったり、待ち人数が100人近い中、少しでも早く患者さんにお薬を出すため分包機の音は真夜中でも鳴り続け、お手洗いにいく間もなく、気が付けば外はもう明るく朝のニュースが

テレビから流れていた。

一日が終わる頃は疲労しきっている身体。しかし、何やら湧き起こる妙な充実感。そこで一句、『箕面の地 朝までお届け安心を』以上、薬局からでした。

